失踪の真相（仮）〈抄〉

―『レジェンダリィ・クレイン』シリーズ短編から―

野間みつね

「地球まで急いで来てくれと呼び出しておいて、それか？」

　頼山紀博は、些か不機嫌な表情で、黒い革張りのソファから腰を上げた。

「至急という話だったから、マスタード星から地球まで瞬間移動で〝跳んで〟きたってのに。……幾ら旧友の依頼でも、必ず首を縦に振るとは限らない。いつも、そう言ってきた筈だよな」

　濁りのないハイバリトンの声が、ローテーブルを挟んで向かい合っていた六十搦みの男性に向けられる。

「わかっているとも。……だが、今回の件、情報局の人間を使うわけには行かない」

　応じる相手の声は低く、苦渋に彩られている。比較的端整な顔は紀博と同じ東洋系だが、既にあちこち皺が刻まれ、髪も銀白色に近く、初老と呼ばれる時期は過ぎようとしていることが窺える。

「そりゃ確かに使えないだろうさ」

　紀博は鼻で息をつき、ひょいと肩を竦めた。

「行方不明になったペットロボットの捜索なんて、百歩譲っても、何処かの探偵事務所に依頼するような話じゃないか」

「そういうわけにも行かないんだ、紀博。……実は、万理子は、お前に頼んでくれと泣いているんだ」

「あのなあ……満、お前が万理子ちゃんに甘いのは、よーく知ってる。だが、だからって、俺をわざわざ此処へ呼び出しておいて、孫娘のペットロボを探せと？　それが、泣く子も黙る銀河連邦軍情報局長官が頭を下げてまでやることか？」

　呆れ果てたと言わんばかりの紀博に、満、と呼び掛けられた相手は苦笑いを浮かべた。

「爺馬鹿と言われようと、孫というのは可愛いものさ。……更に言うなら、件のペットロボ〝マルス〟には、飼い主を護る為の各種機能が搭載されている。当然、盗難や破壊防止の為の二重三重の安全装置も持っている。なのに、文字通り行方不明になった。仮に電源を切られたとしても一定時間後に復電して密かに発信し始める筈の通信電波も出ていない。ついでに言うなら、俺自身の探知能力でも存在の痕跡すら掴めない。……変だとは思わないか？」

　紀博は難しい表情で暫く考えていたが、やがて溜め息をつくと、ソファに腰を下ろし直した。

「……まあ、俺に頼もうとする時点で、お前の超能力でも探し出せなかったんだろうな、って見当は付いたが」

「だったら今少し穏当な態度を見せてくれても良かったろうに」

「ふざけるな、と怒鳴り付けなかっただけ穏当だろ」

「確かにそうだな」

　相手は――銀河連邦軍情報局長官・吉沢満は唇を緩めた。

「報酬は俺のポケットマネーから出すが、万理子も、君に頼めるなら貯めた小遣いを全部出す、と言っているよ」

「うーん、万理子ちゃんの気持ち自体は有難いが、今は探偵系の仕事はやってないからなあ、ちゃんと給与貰って労働してるし」

「雇う相手が偽造の連邦市民カード持ちでも気付けない、かなり杜撰な会社らしいな」

「そういう会社でも、世の中の末端で社会の役には立ってるさ。……成功報酬は、晩飯の奢りってことにしておこうか」

「それは幾らでも。……では、詳しい話と行こう」

　満は、ローテーブルに置いていた小型の情報端末を紀博の方に滑らせると、パネルに触れた。画面を占拠する勢いで、四足歩行タイプのロボットの写真が表示される。もふっとした黒っぽい毛に覆われた、犬型とも猫型ともつかない容姿だが、耳に当たる部分はぺこんと前に折れていた。恐らく、尖ったり角張ったりした箇所を極力減らすよう造型されているのであろう。

「この〝マルス〟タイプのペットロボットは、廉価普及版の〝ヘルメス〟と見た目は大差ないんだが、ジュネーブ・シティ全体では五十体しか割当がなかった。去年の発売時、その内の一体を予約購入して、万理子の誕生日にプレゼントしたんだ」

「万理子ちゃんの生体認証データの登録は」

「勿論、してある。そうでなければ飼い主の護衛は出来ないから。……なのに、出先の遊園地で忽然と姿を消した。一般警察には届けたが、この一か月、何の手掛かりもなしだ」

「まさか特殊警察に持ち込むわけにも行かないだろうしな」

――多分短編になる執筆中作品「失踪の真相（仮）」より

　未来世界を生きる超絶超能力者の受難（？）を描く『レジェンダリィ・クレイン』シリーズの執筆中短編から、冒頭を折本にしました（「ぺらふぇす2025」合わせ）。

　次に〝ミックスナッツ系〟ジャンルごた混ぜ短編集が刊行される場合は、中の一編として収録される可能性大ですね（汗）。

失踪の真相（仮）〈抄〉
―『レジェンダリィ・クレイン』シリーズ短編から―

初版発行：2025年7月12日
頒価：0円（無料配布）
著者：定行美佳（筆名／野間みつね）
発行元：野間みつね個人サークル　千美生の里
発行責任者：定行美佳
連絡先：https://mitsune.jp/
（※メールフォーム有）
©2025　Mika Sadayuki

★この本の一部または全部を、著者の許可なく転載・複写・複製・改変等することを、堅く禁じます。